

5.1.8 課題研究による活動の拡大・継続 事例報告

SGH 指定最終年次に至る過程を通観して見えてくることの一つに生徒自身の「外部連携の姿」がある。もちろん多くの課題研究は昨年度の報告書でも述べた通り、「外部連携」とは言っても専門家から知識を得たり当事者から実情をヒアリングしたりするにとどまってしまう例が多い。高校生の課題研究においては、まずは机上の空論を抜け出し、学校外に目を向けて情報収集をするところから始めるべきだという意味では現時点でのレベルでも一定の成果はあると言える。しかしながら、課題研究で成果を挙げた卒業生の言葉（別項「7 SGH 情報交換会」）にも見える通り、実際の世界や社会は複雑で、課題はなかなか解決に向かわない場合も多い。そうした見地から言えば、外部から情報をもらうだけでなく、自分たちの行動によってどこまで社会に関われるのかを体験的に知ること、そうした中で社会に生きる多様な人々と対話を繰り返していくことが、課題研究を通して向かわねばならない先のようにも思える。

今年度の課題研究の中で、自分たちの行動によって「社会を変えよう」「社会と関わろう」という強い意志を見せ、実際に活動を拡大していった研究を4例紹介する。また別の1例としてSGHでの研修を通して得た強い動機が、短期間で行動へとつながり、活動が世界へ拡大していった例を掲げる。こうした生徒に共通するのは、以下の点である。

- ・行動へとつながる強い疑問
- ・常にある他者への視線
- ・他者と自分とのつながりへの意識
- ・行動と振り返りの繰り返し・継続
- ・他者や周囲を巻き込む力

本来であれば、こうした力がどのように育成されるのかを分析すべきところではあるが、現時点ではそこに至っていない。今後こうしたモデルケースを分析する視点を定めて、どのような因子が働いているのかを考察していく予定である。

① ケース1 ドキュメンタリー映画の制作と上映・発信

研究テーマ 「ドキュメンタリー作品による原子力発電に対する意識改革」

ドキュメンタリー作品名 「日本一大きなやかんの話」

研究期間 2018年度・2019年度

研究生徒人数 2018年度 3人・2019年度 1人*ただし、ドキュメンタリー制作や上映会運営に携わっている生徒は複数名となる。

2019年度論文要旨

原子力発電をどう扱っていくかという問題は、我が国における今後のエネルギー問題を考えるにあたって欠かせない論点である。ところが、原発に関する若年層の関心が低いことや知識が少ないことが複数の調査から明らかになっている。そこで本研究では、「原発やエネルギー問題に関する関心や知識を含めた『意識』の向上をいかに図るか？」を研究課題とし、その課題を解決するために、情報的確かかつ多量に伝える手段として原発に関するドキュメンタリー作品を提案し、特に日本の10代からなる若年層に対するその効果を検証することを目的とする。ドキュメンタリー作品は、科学者、企業、NPO、政府関係者などへのインタビューや、福島や北海道などの取材に基づいて構成した。研究方法として、高校や映画祭、中学生サミットなどを含む10箇所ですべて上映を行い、上映の前後でアンケートを実施、その分析を行った。結果として、視聴者のうち約8割もの人々の原発に関する関心を向上させ、その要因の多くが、新しい知識や視点を得られたことにあることがわかった。さらに、関心が向上した視聴者は原発に対する意見も変わる傾向にあることを突き止めた。その一方で、関心の程度に変化がなかった視聴者も一定数いたが、アンケートの記述だけではその要因を読み取るだけの情報を得ることができなかった。そのため、今後はこの層の生徒に対するインタビューを実施し、具体的な要因を探る必要があると考える。

この研究の最も特徴的な点は国内外での徹底した取材を行い、1年近くをかけてドキュメンタリー映画を（初めて）制作し、その上映先を自力で探しながら、多くの方との対話を通じて作品を修正し完成させたことにある。すなわち「膨大な行動量」と「膨大な他者・外への働きかけ」である。もちろん環境的な幸いも多く働いてはいる。2017年度に彼らが受けた中学3年次の原発に関する社会科と理科の教科間連携授業がなければ、彼らは研究の動機となる疑問を抱けなかっただろう。また2018年度に管理機関の支援としてもたらされた米国・ミシガンへの研修は、海外で多くのことを取材できるチャンスとなった。SGH 海外研修で訪問したフィリピンの現地校は、やがて作品の完成後に学校で映画を上映しアンケート調査の実施に対する協力者となった。しかし、こうした幸いに恵まれた生徒は他にもいる。その中で彼らの課題研究が社会に強い発信力を持つものとなりえたのは、何よりも強い問題意識に裏付けられた情熱と行動量があったからである。

彼らの作品は2018年度～2019年度にかけて以下のような場所で上映された。

- ・福島県立福島高等学校（2回）
- ・福島県立ふたば未来学園高等学校（1回）
- ・岡山県立岡山操山高等学校（1回）
- ・大阪清教学園（1回）
- ・福島映像祭（2回）
- ・高校生のための eigaworldcup 2019 受賞作品上映会（1回）
- ・「とこらぼ」映画会（1回）
- ・江古田映画祭（2回）
- ・Everett High School（1回）
- ・Michigan State University（1回）
- ・東京工業大学 学術フォーラム「多角化の世紀と原子力」主催中学生サミット（1回）
- ・Colegio de Sta. Monica de Angat（1回）
- ・McMaster University（1回）

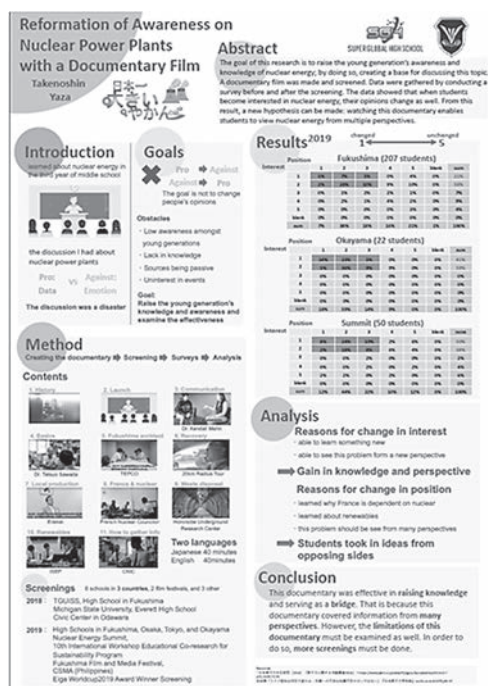
その他今後上映が決まっているもの・BSでの放送などは以下のように予定されている。

- ・BS スターチャンネル
- ・月一原発映画祭
- ・ハンブルク日本映画祭

新聞や雑誌などマスメディアでも以下のように取り上げてもらっている（以下は直近の記事の例）。

- ・NHK World Japan News <https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/news/backstories/751/>
2019年11月23日
- ・朝日新聞 デジタル 2019年12月11日 高校生が原発映画制作 1日に上映と説明
- ・北海道新聞 電子版 2020年1月21日 高校生が原発の賛否問う映画製作 「日本一大きいやかんの話」
- ・週刊AERA 2020年3月9日号 原発賛否に橋をかける

時には生徒が監督としてトークセッションに登壇し、なぜこうした作品を作っているのか、この研究で目指したいところはどこなのかを語る場を得ている。映画上映のみならず、自分たちの思いや考えを自分の声で語る機会を得られているのは社会の反応や厳しい意見を直に聞ける重要な機会である。彼らの活動範囲はクラウドファンディングから海外取材まで広がっている。時に海外の大学の先生方が「NHK World を観た」と言って日本国内の機関を通して生徒に連絡を下さることまで



課題研究ポスター

ある。そうした縁は実際に 2020 年 2 月にカナダで開催された CNA (Canada Nuclear Association) 2020 に生徒が参加できるというチャンスにまで広がり、研究活動の継続を大きく後押しすることとなっている。

② ケース 2 1 年間の継続ワークショップと国際会議での発表

研究テーマ 都市農業プロジェクトを通じた地域参画意識の研究

-日本のボランティア意識の変革を図る仕組みとは-

研究期間 2018 年度・2019 年度

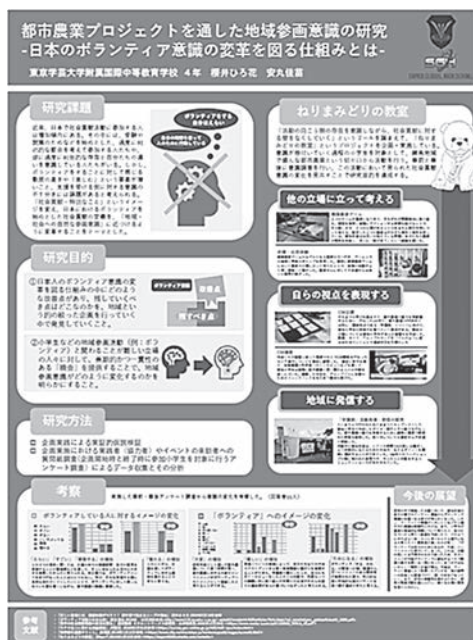
研究生徒人数 2018 年度 2019 年度 2 人

2019 年度論文要旨

日本のボランティア意識の不足や方向性に対し疑問をもったことをきっかけとして日本のボランティア意識の変革を図る仕組みの研究を行う。仕組みを明らかにするために、対象とする世代を絞り、「食」を通して人々の意識の研究を図る第 1 段階として都市農業プロジェクトを企画・実施した。「練馬で生まれる都市農業の魅力」と、「私達中高生だからできること」「子供達が持つ力」の 3 点を重視した企画「ねりまみどりの教室」である。本研究ではその実施内容と意図、実施によって現れた参加者に対する効果をアンケート調査によって分析した。また、「ねりまみどりの教室」の発信イベントで行った来場者アンケートについてもこの企画が社会に与えた影響を明らかにするためにアンケートを実施した。ボランティア意識を日本においてより自然な概念にするには、イベントの進行の中で参加者が「知る側」から「伝える側」に変化する一貫性のある流れが重要だと考えた。実際に 2019 年 4 月から 11 月にかけて「ねりまみどりの教室」を行なった。ボランティアを実施する際に利己的な面と利他的な面を両立し、楽しさを見出せる環境にすること、そして自分が行っている活動の向こう側に支援を必要とする存在がいることへの認識を意識したワークショップを行った。最終的には参加者全員で発信イベントを行い、練馬区の都市農業の認知度向上に貢献した。今後はその研究結果のより深い分析が必要である。

この研究の特徴的な点は、1 年間のワークショップ継続と国際会議での発表である。国際会議は 2019 年 12 月に東京都練馬区で開催された「世界都市農業サミット」である。大規模開催ではないが、世界各国から都市農業に関わる専門家が招聘され、数日間にわたってシンポジウムや分科会が開催されたれっきとした国際会議である。この会議の場で本校生徒は自分たちが 1 年をかけて取り組んできた都市農業への理解を深める小学生向けワークショップについて発表を行った。そもそもこの機会は 2018 年度に当時中学 3 年生だった当該の生徒たちが、都市農業サミットの関連イベントである「みんな de 農コンテスト」に応募し、3 つの優秀プランに選ばれたところに出発点がある。生徒たちの疑問は「なぜもっと気軽に地域でボランティアができないのだろう」という点に根源があるが、彼らはこの疑問を契機として、地域を担う子供達が地域の特色に気づき大仰なボランティア意識を持たずとも地域の農に携わっていく仕組みを作ろうとした。それが 1 年間に亘って行われた「ねりまみどりの教室」である。1 年間、暑い夏の時期を含めて練馬区の農家や練馬区の行政の支援を受けつつ、自分たちで毎回のワークショップの計画や案を作り、さらにはワークショップに参加した小学生を導いて「ねりま祭り」に出展し、地場野菜を販売しながら地域の来訪者と交流する場を拓くということまでたどり着いた。

12 月の都市農業サミットでは、発表言語は日本語が指示されたため日本語で発表したが、その後



課題研究ポスター

のレセプションでは英語であいさつや交流を行い、世界各国のシンポジウムパネリストらと情報交換を行うことができた。イギリスのパネリストは本校生徒の取組を高く評価し、開催区であった練馬区に対して次のようなコメントを送っている。

We are very proud of the friendship we have made with her and we have inspired her to think in a different way of all the things she can achieve in her studies and in her life.

Another one of our very happy memories from Nerima this year. Please invite me again!

また、1年間ワークショップに参加した小学生の一人は、将来の希望として「自分がねりまみどりの教室を引き継いでやっていきたい」と述べた。こうした意志を持つ小さな継承者が表れたというのは、本校生徒の取組が地域に根付こうとしていることの表れだろう。現在生徒たちは、「ねりまみどりの教室」で使用した「模擬農家ゲーム」をキット化して公開・普及する準備をしている。これも自分たちで開発した教材の一つであり、研究と活動の拡大につながるものとなっている。

③ ケース3 「好きなこと」を研究に—e-sports への理解と社会的地位向上を目指して

研究テーマ スタートアップで考える e-sports への取り組み

研究期間 2018 年度・2019 年度

研究生徒人数 2018 年度 2019 年度 4 人

2019 年度論文要旨

近年、産業として注目されている e-sports。市場規模に注目されがちな e-sports だが、様々な経済効果と社会的意義を持ち、国内でも世界でも発展させていくべきだ。しかし、国内では、e-sports の主役であるプロ選手の社会的地位が低いことにより、新たなプロ選手が生まれにくく、発展を妨げる要因となっている。私たちはその課題を解決するために、ファンの獲得を目的とする。ファンを獲得することで、e-sports の市場規模のスポンサー面以外を成長させ、プロ選手の収入に直結させることで、プロ選手の社会的地位を向上させる。ファン獲得のために、スタートアップ的手法を用いた大会運営やイベント運営を行い、その有効性を評価した。結果、目標値を越えることができていたので、有効であるといえる。

e-sports はこの1年あまりで急激にその社会的認知度と理解度が上昇したジャンルである。2019年3月には初の e-sports 甲子園が毎日新聞社の主催によって開催され、全国の高校や大学でも多くの取組がなされている。ただし、依然として蔓延るのは、e-sports に対する偏見である。ゲーム＝依存のような図式でとらえられることも多く、経済的価値や社会的価値について語られることは少ない。本校生徒のこの研究の大きな特徴は、課題を長時間かけて見直し突き詰めているという点、また偏見を単に感情的に払拭するというのではなく、その経済的価値や社会的価値を実践的かつ定量・定数的に分析し、評価・証明しようと試みた点である。

社会貢献や SDG s 関連ばかりが強調されがちな SGH の課題研究としては異色とも言える取り組みであるが、彼らの研究は課題設定にたどり着くまで1年をかけており、その後の1年で圧倒的な行動量と外部とのつながりを得て成果を挙げている。

そもそもこの研究の開始時に生徒たちは「e-sports 部を作りたい」という申し出を学校にできていた。しかし、研究対象となる e-sports 自体に興味や関心はあるものの、何が課題であるのかや何を解決したいのかが伝わる状態ではなく、部活動にした



課題研究ポスター

いという希望もすぐに叶う状態ではなかった。1年余りをかけ、自分たちがやりたいことや関心を寄せている点を何度も見つめ直し、問い直し、2018年度の終わりにようやく現在の課題の萌芽にたどり着いた。時を同じくして校内で初めての e-sports に関する Global Café を開催し、同級生や後輩たちと様々な視点から e-sports の価値や意義について討論している。その後生徒の一人が e-sports に関する学生団体を他校の生徒とともに立ち上げ、さらには e-sports 企業でインターンをするという段階に至った。そうした生徒の実践的な取り組みが今年度結実し、自分たちで大会を主催し、膨大なデータを収集することに成功している。

「好きなことを研究したい」という生徒は多くいるが、好きなことを徹底的に見つめてその背後にある問題や課題を突き止め、自分のためだけでなく他者のために情熱を持って課題解決に取り組むということまで至れるのかを考えねばならない。研究するというのは単に娯楽的な楽しみばかりを追いかけては成り立たない。影の部分や問題の部分をあぶり出す過程も必要となるし、そこにこそ研究する意義がある。この研究が示したのはそうした点であろう。

なおこの研究は現在、地域おこし・町おこしに e-sports を活用しようという取り組みに拡大し始めている。すでに学校が関与している点はほとんどなく、学校も教員も「見守る」のが唯一の仕事となっている。生徒の研究は独立し社会とつながり始めているのである。

④ ケース 4 必要な情報を必要な人へ届けることを目指す取り組み－実践的な成果物の持つ力

研究テーマ 外国人観光客が日本の医療を受けやすくするための改善策

研究期間 2018 年度・2019 年度

研究生徒人数 2018 年度 2019 年度 4 人

2019 年度論文要旨

私たちは、「外国人観光客が日本の医療を受けやすくするための改善策」といテーマで研究を行っている。本研究の目的は外国人観光客が日本の医療機関を利用する際のトラブルを減らし、安心してスムーズに受診できるようにすることだ。2020年の東京五輪に向けて訪日外国人が増加しているにも関わらず、外国人に向けた医療サービスが十分に整っていないという日本の現状に着目した。そこで私たちは、先行研究と5つのヒアリング調査から得た知識を元に英語版の外国人観光客向けの医療用パンフレットを作成し、医療従事者の方に内容の正確性を確認していただいた。パンフレットは、外国人患者の日本での受診をサポートするものであり、診療の一連の流れ、注意書きや役立つ団体、救急車の呼び方、そして問診票などが記載されている。私たちは、パンフレットを12か所の宿泊施設に設置させていただき、8大学の交換留学生に評価をお願いした。パンフレットに対するフィードバックの主な内容は、医療用語の使い方、基本知識、症状の例の厳選に関するものだった。今後はさらなる宿泊施設でのパンフレットの設置、ウェブサイトの運営、クラウドファンディングを活用してパンフレットの多言語化を行い、パンフレットの利用率を向上させていく予定だ。

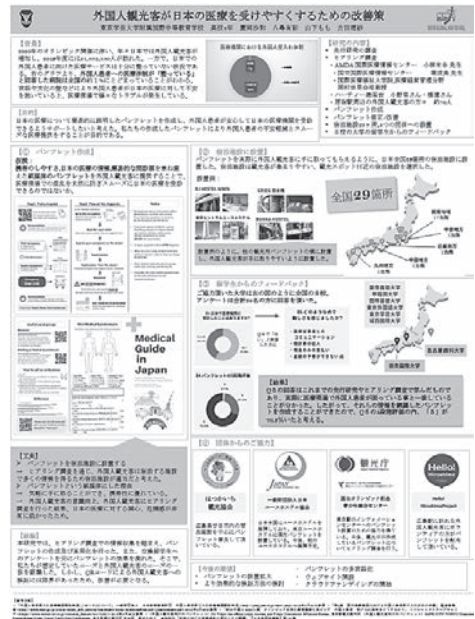
この研究は他の研究と同様2年間に亘って行われてきた。2020年の東京オリンピックを見据えたものであったが、2020年3月現在、新型コロナウイルスの感染拡大という状況を受けている今、必要な情報が必要な人々にきちんと届くということがいかに重要かを目の当たりにして、研究や活動としての意義や役割がより重いものとなっている。

研究の特徴の1点目は1年間をかけた課題の継続的な見直し、2点目はデリケートな問題を含む医療関係の情報収集と調査、それに裏付けられた「発信すべき情報」の洗い出しと精査である。さらには本項で紹介してきた他の取組と同様、圧倒的な行動力と外部への働きかけによって発信の場とフィードバックを得たことにある。

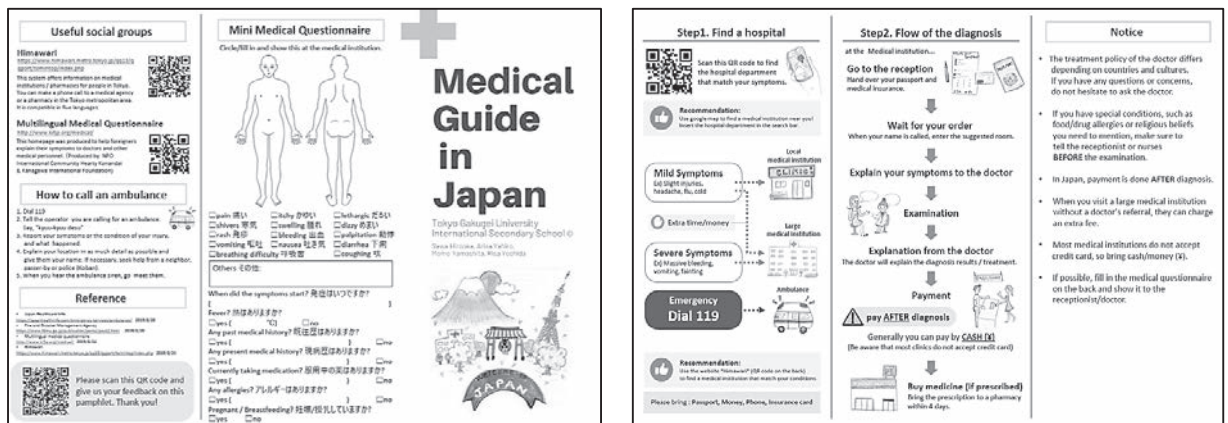
彼らの研究の成果物は日本を訪れる観光客向けの医療情報のパンフレットである。しかもスマホで見るアプリではなく、あえて紙媒体でポケットサイズのものを作成している。スマホなどのデジタルデバイスは確かに便利であるが、電気がないと使えない、Wi-Fiがないとweb上の情報は収集できないという難点がある。さらにあまりに膨大な情報は、どれが適切でどれがデマかも判別しに

くく、それを選別しながらでは実際に医療機関にかかることが遅れてしまう事態になりかねない。生徒が目をつけたのはそうした点である（もちろんデジタルデバイスで使えるコンテンツも開発予定ではある）。パンフレットには、外国人居住者や外国人観光客が実際に抱える問題を丁寧に調査した上で精査された情報が掲載されている。彼らは外国人旅行者のみならず医師や専門家など医療従事者にもインタビューを行うほか、国内にいる外国人の留学生に実際にパンフレットを送ってフィードバックを得ている。さらにはそうした地道な調査を基盤として修正・作成したものについて更なるフィードバックを得るべく、現在は日本各地のホテルや観光関係機関にパンフレットを設置してもらおうという試みを行っている。もちろんすぐにフィードバックが得られるわけではない。しかし実際に置いてくれている場所は多くあり、そうした場所の発掘は全て生徒が自分たちで行っている。前掲の外国人留学生たちについても自分たちで 100 以上の大学へメールを送り、反応を頂けた大学にパンフレットとアンケートを送って依頼するという作業を自力で行っていた。つまりは彼らの研究を支えていたのもまた「圧倒的な行動量」なのである。

直近ではこのパンフレットの存在を知った長野県のスキーロッジからパンフレットを置きたいという要望が学校を通じて寄せられた。実用可能と判断して連絡をくださったということであった。必要な情報を精査し、必要な人に届くようにと努めてきた生徒の研究成果は、いよいよ社会と直接に結びついたのである。



課題研究ポスター



ケース 4 の成果物 パンフレット

⑤ ケース 5 海外研修が強い動機を生んだーウガンダ 南スーダンでのプロジェクト実行例
活動期間 2019年4月～2020年2月

最後に紹介するのは、課題研究そのものではなく、海外研修が生徒に強い動機を与え、新たな課題設定をさせ、短期間で実際の行動に出させた例である。

2019年の3月に実施した本校の2018年度SGHフィリピン研修は、現地の日本NGO「ソルトパヤタス」の支援を受け、パヤタス地区でのスタディツアー・フィールドワークを行った。パヤタス地区はもともとスモーカーマウンテンと呼ばれるごみ山があった場所で、現在もリサイクルプラスチックの収集などを行って生計を立てている貧困層が一定数居住している。生徒が強い衝撃を受けた

のはその家庭の一つを訪問した時に、子供や大人の歯の状態（口腔衛生の状態）が予想以上に悪いということであった。そもそも医療に興味を抱いていた生徒はこうした途上国の貧困層と呼ばれる人々の生活の質(QOL)の向上が急務であると考え自分で口腔衛生に関するプロジェクト案を立案し、フィールドをアフリカ・ウガンダの南スーダン難民居住区に変えて「未来ドラフト 2019」（ワールド・ビジョン・ジャパン主催）に応募した。後にこのプロジェクトの協力者となる兄はやはり同様に2017年度の本校のSGH フィリピン研修に参加した経験があり、兄妹で課題を共有してプロジェクトを遂行することとなった。このプロジェクト案は「未来ドラフト 2019」のグランプリを受賞し、実際にウガンダへ渡航しプロジェクトを実施することを目指した。ただし、資金が与えられるわけではなく、自分たちで資金集めや協力者を依頼するところから始めねばならず、当初は応募した本人もかなり苦労していた。資金集めはクラウドファンディングを用いたが、社会の理解を得るために、PR 動画を作成して広報活動も行った。この PR 動画では生徒と同じ学年の生徒や後輩たちが100名以上出演して学校の中庭で歯を磨いている。プロジェクト全体に関わっているわけではないが、100名以上の生徒を「巻き込んで」協力を得ることができたということである。

結果として生徒は兄や活動に賛同した未来ドラフトの準グランプリを獲得した北海道苫小牧の学生、ワールドビジョンジャパンのスタッフの方、協力を申し出て下さった日本人の歯科医師の方と5名で2020年1月にウガンダへ渡り、現地の難民居住区で口腔衛生のワークショップや活動を実現させ、無事帰国した。活動の詳しい状況はワールドビジョンジャパンの web サイトや生徒自身の活動を紹介している web サイトを参照されたい。

SGHの海外研修は課題研究の深化に資することを目的としている。しかし、さらに大きな影響を与えることもありうるということをこの活動は我々に知らしめている。

- ・ワールドビジョンジャパン web サイト
https://www.worldvision.jp/news/shien/20200121_2.html
- ・生徒の活動団体紹介 web サイト
<https://chekachekajapanbid.wixsite.com/website>
- ・内田洋行株式会社開設 UCHIDA TV Vol. 392 でのインタビュー動画
<https://www.youtube.com/watch?v=rcEtWJTEKxs&feature=youtu.be>



上図 生徒の活動団体のポスター。このポスターも活動した生徒の友人が作成している。複製はご遠慮ください。

©Mayuko Kubo : @TGUISS2019